

I 機 の 歴 史

織物は南方からの技術伝播があったと認められているが、弥生時代前期までには、我国において織物が存在した痕跡がある。山口県綾羅木遺跡から、同期の苧麻布が出土しており、又、弥生式土器底部に圧痕として残っている。

織機の道具は、静岡市登呂、奈良県唐古遺跡の他各地の弥生式遺跡から出土しているが、いずれも原始居座機であろう。古墳期になると中国から帰化人が、錦綾の技法を伝え、織機に改良が加えられて飛躍的發展を見た。そして五世紀前半に宋と交渉した頃に、箴梭機が輸入され、絹機の技術が伝わったであろうが、これは畿内の一部に限られたため、古式の機と平行に使用された。しかし、奈良時代には中央から挑文師（製織指導者）が、地方へ派遣され生産が拡大された。この律令制による統制的生産が衰退し始めると、織部司所属の織手は束縛から解放され注文生産を営みはじめた。

奈良時代後期に律令制度がくずれると遺族たちは、邸内に機をすえ織工をやとって織り始めた。又、一般の調庸生産に使用された機は居座機であったが、地方産業にあたえた影響は大きく各地に特産物が生まれた。

十二世紀頃に地方生産地の再編成が行なわれ、阿波の絹、美濃の八丈、常陸の綾、紀伊の縑甲斐の班布、丹後の和布、石見の紬などが特産品として知られるようになった。

中世末から中国の明の織法が伝えられ、金襴、緞子、綸子、縮緬、こはくなどは、堺を通して西陣へ伝来した。

これより機の改革が行なわれたが、その設置の中心はやはり西陣、堺にとどまった。そして各藩の国産奨励のため西陣の織工招聘と高機、空引機の移植により各地に広がった。黒田藩の博多織、伊達藩の仙台平、明石藩の木綿織など、藩経済の支柱となり、特産品ともなった。しかし、一般に居座機から高機への転換は機業地を除いて停滞的で、明治中期頃までまたなければならなかった。

明治維新以後、西欧から洋式技術が導入され、新しい発展段階をむかえた。その一つに、ジエン＝ケイにより発明された飛杆（バツタン）装置の移入は、杆投げをしていた片手が解放され箴打だけとなるので製織能率は、ほぼ二倍となり、又、広幅織物の製織を可能にしたので明治前期から広く使われた。つまり高機の改良で、空引機はジャカードへと改革されていった。

その後紡機が輸入され、それに改良が加えられ、オートメーション化が為された。絹機においては、小工業的になってしまった。今日、我国における織機工業は、西陣、博多、倉敷などを中心に日本的織物を生産している。

種類	時代	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	近代	現代
縦機								(明治)	→
水平機									→
傾斜機									→
居坐機					5世紀				→
高機									→
空引機								ボタン装置	→
紡機								ジャカード機	→

表 1

【高機の歴史】

手織機の種類で、大和機、京機ともいい、高機の名称は居坐機に対して腰の位置が高くなっているところからつけられたのであろう。ただ古文書、特に西陣関係のものに高機とある場合は、空引機のことと地方で言う高機を二枚機と称している事に注意すべきである。

高機は、五世紀中葉頃に中国の江南地方から伝えられたもので、主として絹織物の製織に使われたが、一般には普及しなかった。

近世中期頃から絹、木綿織物の全国的普及に伴ない、中央から各地に伝わった。現在では伝統的織物を生産する地方にわずかに残されているにすぎない。

参考文献

- 講座日本歴史 2 岩波書店
- ジャポニカ 小学館
- 日本史辞典 角川書店

第1図

